

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19520350

研究課題名（和文）モンゴル文語（地域文語を含む）形成史から見た仏典モンゴル語の研究

研究課題名（英文） Studies on Mongolian Buddhist Literature in view of the process of development of the written Mongolian including the Local written Languages

研究代表者

樋口 康一 (HIGUCHI KOICHI)

愛媛大学・法文学部・教授

研究者番号：20156574

研究成果の概要（和文）：

仏典モンゴル語さらには俗文献で使用される古典期モンゴル文語の形成史の解明を目的とする。これを達成するため各地に所蔵される文献資料の調査と解析を試みた。その結果、地方の文語が中央部における文語形成に果たした役割を解明した。同時にまた、モンゴル語仏典の「地方版」は実は清朝時代の大蔵経の校訂・出版の際正式に採択された版以外のものであり、元朝時代に翻訳された異本を忠実に反映した、言語学的及び文献学的に高い価値を有するものであることを明らかとした。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this study is to clarify how the Buddhist Mongolian, as well as the Written Mongolian used in secular literature of the Classical Period was established. Through investigation into the materials, especially Buddhist literature, kept in libraries and archives of the world and analysis of those lines in detail, we shed new light on the role conducted by local versions of the Written Mongolian in the process of formation and establishment of the standard Written Mongolian. Also did we clarify the value of local versions of Buddhist literature in view of linguistics and philology; they are in fact variants of the authorized versions adopted in the Mongolian Buddhist canons published in the 18<sup>th</sup> century and were productions of the 14<sup>th</sup> century, when the Uighur Buddhism and writing system were introduced into the Mongols hand in hand.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学（言語学）

キーワード：① モンゴル語 ② 古典期モンゴル文語 ③ 仏典モンゴル語 ④ 大蔵経  
⑤ 蔵外仏典

## 1. 研究開始当初の背景

モンゴル帝国時代にウイグル文字を借用してモンゴル人が自らの言語を表記したものが、モンゴル文語である。多少の近代化を経つつ、21世紀に至ってもこの文字はモンゴル人によって使用され続けている。

そもそもモンゴル人に文字を伝えたウイグル人によってウイグル仏教がモンゴルにもたらされたのであった。元朝時代には権力者の帰依するところとなり、仏典の翻訳解版もさかんに行われた。

残念ながらその成果自体は今日には伝わっていない。現在目睹し得るモンゴル語仏典の大半は17世紀のチベット仏教の伝来定着以降に作成されたものである。

ところが、その行文を仔細に検討すると、そこには元朝時代特有の形式が多数発見される。このことは、既に研究代表者を含む一連の研究者によって明らかにされて久しいのであるが、14世紀の元翻訳はかたちを変えて継承されているのである。したがって、モンゴル語仏典はモンゴル語史の諸問題解明にあたり大きな貢献をなし得る資料として活用可能である。そのひとつが文語の形成及び発展の歴史に他ならない。

本研究は、その発展を企図したものであり、新たに地方文語を視野に含めて、モンゴル語仏典、それも従来あまり研究の手が及ばなかった地方における出版・書写にも相応の配慮を払い、その言語の特徴解明に立脚しつつ、モンゴル文語の成立史を解明しようとするものである。

## 2. 研究の目的

モンゴル文語は13世紀にウイグル人から文字の用法を学んだモンゴル人が、自らの言語を記すために確立したものである。それは相応の現代化を施されながら、今日においてもなお内蒙古自治区においてモンゴル語表記のために使用され続けている。

中期モンゴル語時代に成立したモンゴル語仏典は『元朝秘史』等の世俗的な文献に勝るとも劣らない資料的価値を有するものであることは、研究代表者等によって夙に明らかにされている。その仏典の言語もまたモンゴル文語であり、文語の発展は仏典の翻訳著述と平行しながら、徐々に書記言語としての

不動の地位を確立していったのであった。

このように仏典と文語はいわば両輪として発達したのであるが、17世紀のチベット仏教の第二次導入以降、各地方で仏典の翻訳や出版等に使用された地方文語も独自の発達を遂げて、オイラット文語等を生んだことはよく知られている。

本研究においては、研究代表者自身のものを含めた従前の成果蓄積を十全に援用しながら、量的には他の資料を圧する仏典のモンゴル語が14世紀以降の文語の規範確立にどのような影響を与えたかを、これまであまり視野に入れられることのなかった、ブリヤート、オイラット、カルムック等の中央部からは離れ、独自の地域文語を確立していた方言をも視野に入れながら、考察を試みることを目的とするものである。

## 3. 研究の方法

研究代表者は従来の科学研究費等の取得状況が示す通り、当該分野にあっては着実な成果をあげているが、本研究においても従前の研究を通じて蓄積された文語文献読解の手法が縦横に駆使される。

特に中期語においてはウイグル語、チベット語等の周辺諸言語との接触がもたらした借用形式が多用されるが、文献言語における接触の実相については知るところの多い研究代表者にとっては、これらの解析も、自家薬籠中のものと称して過言ではない。

換言するなら、本研究は既に成果蓄積を通じて有効性が立証されている手法により着実な成果達成を企図するものに他ならないのである。

## 4. 研究成果

内蒙古自治区やモンゴル国、ロシア連邦共和国等世界各地に所在する文書館所収の資料を搜索し、仏典類の収集と資料的位置づけの確立を試みた。本研究の意義を、日本におけるモンゴル学発展の中に位置づけた講演が、下記成果の招聘講演④である。

資料として活用可能なものについては、その行文を解析し、異本との糾合を経て、校訂テキストの作成を心がけた。下記成果の論文①は、その産物である。

テキスト化された資料を基にそこに出現

する形式の分析を通じて、文語形成の歴史的過程の一端を明らかにする作業が着手された。その副産物が、下記成果の論文④に他ならない。

これと平行して地方文語で記された文献の収集と分析も開始された。特にオイラット文語の形成と変容に意を用いた結果、ジュンガリアを故地とし、したがって方言区としてはオイラット語と同じ方言区に属しながらその後の歴史的経緯の中で移住を余儀なくされた甘粛省肅北蒙古族自治県のモンゴル人たちの言語が注目に値するものであることが明らかとなった。その全容解明は、本研究とは別途推進されるべきものであるが、本研究に関わる成果としてあげられるのが、下記成果の学会発表②であり、その草稿に加筆修正した論文③である。これらはこの言語の存在を初めてアカデミックな世界に紹介する試みであった。

文語は当然ながら文字言語である。研究の過程で研究代表者の母語である日本語にかかる文字事情とモンゴル語の文字事情との対照性は常に意識せざるを得ない問題であるが、これに関して従来の知見に基づき本研究の成果を加味して考察したものが下記論文の⑤及び⑥である。特に⑤は、招聘講演③の草稿に加筆修正したものであるが、日本語教育に携わる研究者教育者に向けて発信されたもので、広く関心を呼んだ。

本研究においては、先に紹介した通り、文語形成史の一端が明らかとなり、特に仏典の言語が地方版をも含めて、その形成に大きく関わったことが解明された。その成果を集大成した研究発表が下記①であり、その改訂版と称し得るものが、下記論文①である。

本研究の成果はこれらにとどまるものではなく、その一部は今夏の国際会議でも公表される予定である。また、この問題解明については研究手法の更なる精緻化が不可欠であるが、幸いにもそれを企図する新たな科学研究費補助金による研究が可能になったことは喜ばしい限りである。

また、先にも述べた通り地方文語形成史という問題解明の副産物として新たな価値ある方言が発見された。これについては、別途、現地調査も含めた研究が必要であり、その条件整備に向けて現在努力を傾けているところである。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

- ① Koichi, HIGUCHI、Two Unreported Manuscripts of the Mongolian *Manjusrinamasangiti*; A Preliminary Report、愛媛大学法文学部論集人文科学編、査読有、第28号、2010、47-66。
- ② Koichi, HIGUCHI、How Mongolian Buddhist Works were translated and revised?、*Myth and Mystery in the Altaic World*、査読有、2009、64-73。
- ③ 樋口康一、中国甘粛省肅北蒙古族自治県のモンゴル語方言の指示詞体系、*New Horizons in Altaic Studies*、査読有、2009、47-60。
- ④ 樋口康一、歴史言語学、月刊言語、査読無、第38巻第5号、2009、32-35。
- ⑤ 樋口康一、いったい富士山のふもとにオウム(鸚鵡)が生息しているのか?—漢字文化圏の周縁部に位置する日本の文字文化の一側面、日本語文学、査読有、第39巻第3号、2008、1~14。
- ⑥ 樋口康一、遊牧世界と日本—越境する文字文化、日本語文学、査読有、第38巻第1号、2008、1~12。

[学会発表] (計5件)

- ① Koichi, HIGUCHI、Mystery of Mongolian Buddhist Works、The 52nd Annual Meeting of the Permanent International Altaistic Conference held at Huhhot、2009。
- ② 樋口康一、中国甘粛省肅北蒙古族自治県のモンゴル語方言の指示詞体系、The 9th Seoul International Altaistic Conference、2009。
- ③ 樋口康一、いったい富士山のふもとにオウム(鸚鵡)が生息しているのか?—日本の文字文化の一側面、第4回日本語教育国際集会招聘講演(釜山外国語大学校)、2008。
- ④ 樋口康一、日本のモンゴル学の歴史と展望、西北民族大学招聘講演、2008。
- ⑤ 樋口康一、遊牧世界と日本—越境する文字文化、韓国日本語文学会2007年度春

期学術研究大会招聘講演、2007。

〔図書〕（計0件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

○取得状況（計◇件）

〔その他〕

ホームページ等

なし

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

樋口 康一 (HIGUCHI KOICHI)

愛媛大学・法文学部・教授

研究者番号：20156574

### (2) 研究分担者

該当なし

### (3) 連携研究者

該当なし